

様式 1

研究報告書（平成 27 年度）

提出者 猪股 祐介

提出年月日 2016 年 5 月 7 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 満州揚子における戦時性暴力に関する言説分析

英文 Discourse Analysis of Wartime Violence against Japanese Refugees in Manchukuo

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

本研究の目的は、戦後日本の満洲引揚げにおける戦時性暴力の言説を、小説・体験記・聞き書きを対象より収集し分析することによって、それら言説がいかなる権力関係により構築されたかを明らかにすることである。

そのねらいは、満洲引揚げにおける戦時性暴力を、戦争に不可避な「悲劇」として自然化する言説や、「慰安婦」等の戦時性暴力の一つとして一般化する言説をもって、戦後日本の被害の「戦争の記憶」に回収してきたナショナリズムに抗することである。これら言説は帝国日本の加害性や日本人内部のジェンダー・階層・エスニシティによる差別を隠蔽することで、一枚岩の「戦争被害者としての日本人」を構築してきた。そのことを小説・体験記・聞き書きが「書かれた時間」と「いま解釈される時間」双方に目配りして実証することが、本研究のねらいである。

満洲引揚げにおける戦時性暴力に典型的な言説は、「ソ連兵による強姦」であり、それは敗戦国民にとって「防ぎようのない暴力」であったというものである。そして「売春婦が犠牲になってくれたおかげで、自分たちは助かった」という結末を持つものである。しかし筆者による岐阜県の郡上村開拓団と黒川村開拓団のインタビュー調査により、「義勇軍団員による強姦」もあり、幹部団員はソ連兵と交渉する主体性を持っており、独身女性が犠牲になった事例があることが判明している。このようなモデルストーリーを逸脱する言説は小説・体験記・聞き書きにおいても見出させるだろう。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

猪股祐介. 2015. 「ホモソーシャルな戦争の記憶を越えて」. 『軍事史学』第 51 巻 2 号: 94-115 頁。

### 【成果の概要】(800字程度)

当初満洲引揚者全般を扱う予定であったが、今年度は満洲移民の小説・体験記・聞き書きに限って、満洲引揚げにおける戦時性暴力の言説を収集し分析した。

ほとんどは「研究のねらいと目的」で述べた典型的な言説＝モデルストーリーに沿ったものであった。ただそれらを仔細にみると、それら記述には次の3つの特徴があることが分かった。

第一にソ連兵に対する人種的偏見である。「ロスケ」という蔑称が用いられ、野蛮で強姦するのも無理からぬ人種であり、交渉が成立しない異人種とされる。第二に敗戦国民であるため戦勝国軍には逆らえなかったという、敗戦国と戦勝国の非対称性の強調である。第三に「売春婦が助けてくれた」という記述が多く見られることである。それに引き換え、「助けてくれた売春婦」のその後についての記述は極めて少なく、あっても「引揚港で中絶したのだろう」と推測に基づく記述であった。

これら3つの特徴は事実というより、「強姦被害者への配慮」に基づくものであろう。ソ連兵の野蛮と敗戦国民の非力を前面に出すことで、被害者に全く落ち度がないことを示す。また売春婦という「外部の人間」が被害者であったとすることで、開拓団員という「内部の人間」が被害者であったことを隠す。しかしこうした「強姦被害者への配慮」において、モデルストーリーを逸脱する戦時性暴力の痕跡は消されてしまう。そこでは、「日本」や「開拓団」という共同性をもつ権力だけでなく、性暴力に特有の生一権力が働いていることを明らかにした。

また満洲引揚げにおける戦時性暴力の言説のうち、1990年代の「慰安婦」の社会問題化以降、「慰安婦」と強姦被害者を同列に論じることで、「慰安婦」における帝国日本の加害性を無化する言説が台頭してきていることを明らかにした。日本人も満洲引揚げにおいて「慰安婦のような目にあつた」と主張することで、「慰安婦」に対する日本の戦争責任を免責しようとする言説である。これについては、「慰安婦」や「旧ユーゴの民族浄化」等をめぐる国際的女性運動によって一般化した「戦時性暴力」が、ときとして、侵略や植民地支配を否認する言説に利用されかねない危険性を指摘した。

### 【通信欄】